

## お仲間の近況報告

日本テレマン協会創立者 27 回生延原武春氏

## HKラジオの取材に応じる

昨年、12月14日（金）、NHKラジオ深夜便の再放送がありました。いつもは9時には寝ている私が目覚ましをセットし、8時には床に着きました。何しろ放送が始まるのは25時。これって15日（土）1時のことですよ。ね。再放送ということは、既に9月に放送されていたのです。私は不覚にもその時は気付いておりません。

延原さんについては、既に何度もこの会誌で取り上げさせてもらっています。何しろ、ドイツの大統領から勲章をもらい、10年ほど前にはNHK・TVのインタビュアーにも。その他、新聞等に登場されることしばしば。

私と延原さんは幼稚園、千二小の低学年の3年間、同じクラスだったのと、家が比較的近かったこと、母親同士が仲が良かったことなどで、「タケハルちゃんとナオヒロちゃん」の仲。日本を、世界を代表する音楽家に失礼と思うが、この後ずっと「タケハルちゃん」で通わせて下さい。

## タケハルちゃんの熱い想い

45分に及ぶインタビューでは、幼い頃から絵とヴァイオリンを習っていたこと、一中でコーラス部を立ち上げたこと、その中学3年の時に家庭の事情で千里山から庄内に引越されたことが語られました。その新居の裏にあったのが大阪音大付属高校。そこに入学し、志望の少ないオーボエを選んだことが、18世紀のバロック音楽を代表するドイツの作曲家テレマンとの出会いでした。

一般的日本人で、テレマンの名を知る人は少ないでしょう。タケハルちゃんも例外ではなかったようです。

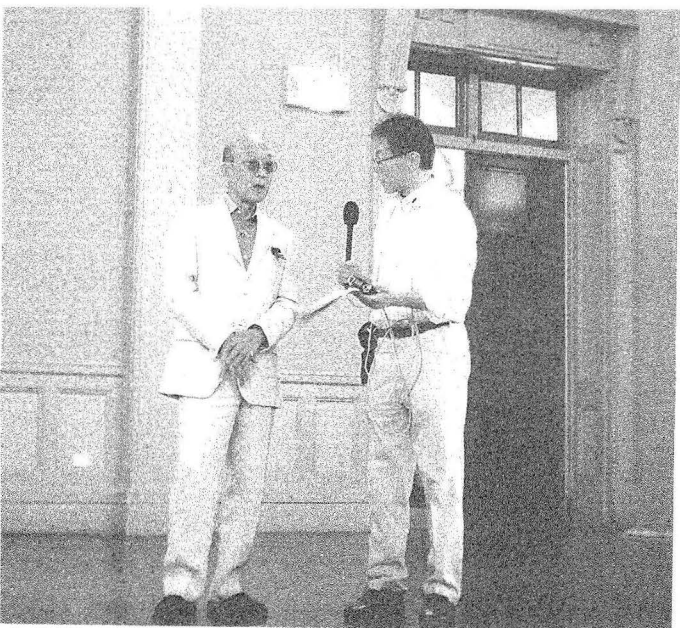
人と人との出会い。以来テレマンに魅せられて55年。テレマンはバッハ、ヴィヴァルディ、ヘンデルと同時代の人で、仲もよかったそうです。特にバッハとは彼の次男の名付け親になるほど。ヨーロッパでは一番の人気者であり、長寿（1681年—1767年）であったことから、当時の作曲数は間違いなくギネスブックもの。

これらはタケハルちゃんの軽妙な大阪弁で語られたことですが、でも私にはその語りの中に、タケハルちゃんの「音楽への拘りと同時に大阪への熱き想い」がひしひしと伝わってきました。

## 音楽への拘り

科学技術の発達には、楽器の材質や細かな部材に及び、

大阪 中之島中央公会堂でインタビューを受ける  
タケハルちゃん



音質を高めたことでしよう。さらに音響効果抜群の大ホールに、マイクやスピーカーの発達。これらはバロック音楽が創られたころとは大きく異なっております。タケハルちゃんは、バッハやテレマンがその音色に合わせて創った曲はその当時の楽器（古楽器）で演奏すべき。彼らが耳にした音色への拘りが強いのです。

楽器がそうなら、当然のことにその演奏を聴くホールも同じ。バロック音楽は、教会や貴族の館の一室で演奏された室内楽。聴衆は演奏者と同じ高さの床・楽器と同じ高さで聴き、音は全て前から流れてきます。

そのような当時と同じような環境で演奏が、聴くことが出来るのが、数年前に改築された大阪、中之島中央公会堂の3階にある集会場です。

## 『中之島をウインに！』

権威を嫌い、自主・自立と自由を愛す大阪精神。

今や、否、もう何十年前から、政治経済だけでなく、美術・音楽・文学・スポーツまでも東京一極集中の世。

タケハルちゃんは、音楽への拘りと同時に、権威とかわけの解らぬ仕来り的なことが大嫌い。

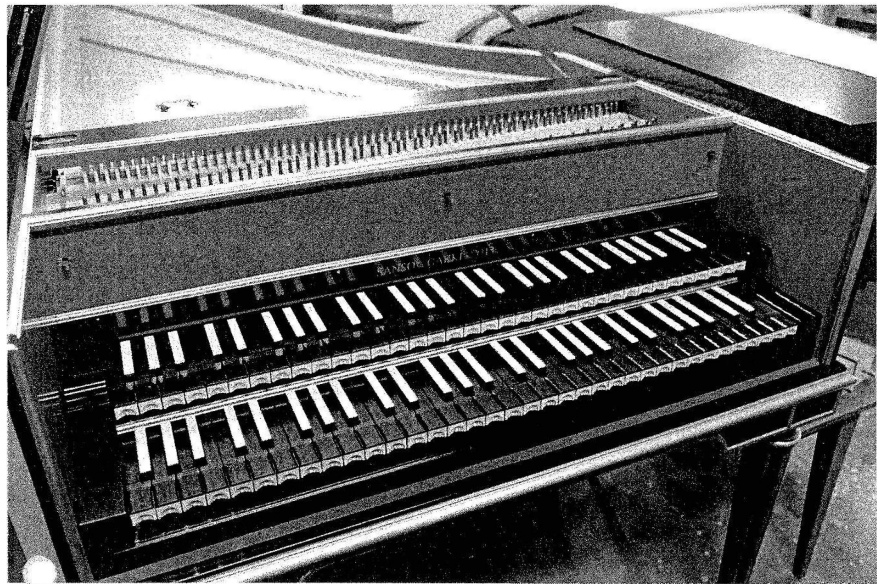
『自由で、楽しいことが第一。権威の東京 何するものぞ。蘇ろ 大阪！』の反骨精神の持ち主 とナオヒロちゃんはみただけですが、「違つ？ テケハルちゃん？」



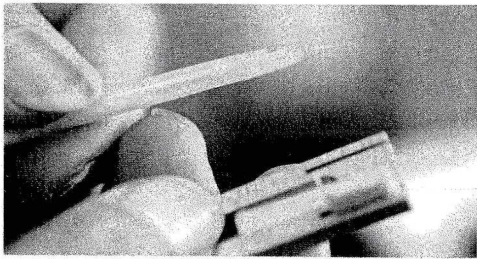
## 資料編(1) チェンバロとは

ピアノによく似た下の鍵盤楽器は、『チェンバロ』という。14世紀に発明されたといわれ、ルネサンス期からバロック期にかけて、宮廷音楽に用いられ、広く演奏されていた。バロック音楽の作曲家バッハも、「チェンバロ協奏曲」をはじめとする数多くの楽曲を遺している。しかしその後、ピアノという、音に強弱が付けられる楽器が発明され、より多彩な表現方法が可能になったため、現代ではあまり見かけなくなりましたが、古典音楽には欠かせない楽器のひとつだ。

チェンバロを見ると、まず楽器の美しさに魅了される。鍵盤に指を置くと、軽やかで華やかな音が響いた。鍵盤を弾く演奏法は同じでも、ハンマーで弦を叩くピアノと違い、チェンバロは鳥の羽の軸などで作られた爪で弦を弾く構造だからだ。「倍音」と言われる複雑な音が混然一体となって聞こえる。心地よく耳から入り、気持ちりが和む。このような音色は古典楽器に共通のようで、ここで作られているリュートやライアーといった楽器の音色も、同様の癒し効果があるようだ。



宮廷楽器として装飾も美しい「チェンバロ」



鳥の羽根の軸で弦を弾く



ポータブルのチェンバロ

## 資料編(2) オーボエとは

木管楽器で、上下に重ねた2枚のリードを持つことからダブルリード楽器という。オーボエの外見はクラリネットと非常によく似ている。遠くから見ただけでは違いが解らない。クラリネットとの外見上の違いは、

演奏する際に奏者が口を付ける部分、管体上部に取り付けるリード部分の形状である。

クラリネットは1枚のリードを管体に取り付けるようにして固定するのに対し、オーボエは2枚のリードを重ねて金属製のチューブを組合せ、ストローのような形状にしたリードを管体上端に挿しこみ演奏する。要は、奏者が口を付けている部分が細ければオーボエ、太ければクラリネットなのである。

オーボエは楽器進化の歴史上、他の楽器とは異なり多くの困難を乗り越えてきた楽器であり、それ故にキーマカニズムが非常に複雑に出来ている。大小併せて400〜500もの部品で構成されており、まるで一種の精密機器のような楽器である。精密機器と呼ばれる所以はパーツの多さからだけでなく、バランス調整の難しさや、気候変動による影響の受けやすさなどもある。

構造の単純な楽器では、緩んでしまったネジは単純に締めればいだけだが、オーボエの場合はそうはいかない。ネジがちよっと飛び出しているからといって、うっかりそのネジを回し過ぎると途端に音が鳴らなくなる。音程がおかしくなるなどという事態に発展する。